

## 連載「国際プログラムの学習成果分析とEポートフォリオ」第3回

# 事例紹介(2) 北米中西部の大学における運用事例

九州大学教育改革企画支援室特任助教 小貫 有紀子

ONUKEI Yukiko

立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター准教授 平井 達也

HIRAI Tatsuya

### 1. はじめに

前号では北米東部におけるEポートフォリオの運用事例として、ジョージタウン大学とバージニア工科大学が紹介された。今号では中西部の大学における事例として、IUPUI (Indiana University -Purdue University Indianapolis) を紹介する<sup>1</sup>。

実際は、筆者らは学習成果分析を活発に行っている中西部の3大学を選び、訪問を行った。それらの大学とは、IUPUIに加えて、Kalamazoo College および Bowling Green State Universityであった。しかしながら、現在学習成果分析にEポートフォリオを活用している大学としてはIUPUIのみであったため、本稿ではIUPUIにおける運用事例について詳細に紹介する事とする。なお、Kalamazoo College および Bowling Green State Universityにおいては、過去Eポートフォリオをトップダウンで全学に導入しようとしたが、教職員の強い反発により実現しなかったという経緯がある。Eポートフォリオのコンテンツ開発や活用方法もさることながら、各ステークホルダーの同意を得ながらいかに大学に導入していくかがEポートフォリオ運用の鍵であることが中西部の事例からも示されたと言えよう。

以上をふまえて、今回はIUPUIがEポートフォリオを導入した背景、Eポートフォリオの具体的な活用方法、IUPUIにおけるEポートフォリオの特徴と課題を中心に運営事例を紹介する事とする。

### 2. 中西部の事例：IUPUI (Indiana University -Purdue University Indianapolis)

#### 2-1 大学および教育戦略の概要

IUPUIは1968年にインディアナ大学とパデュー大学のパートナーシップによって設立された州立大学である。インディアナ州の州都であるインディアナポリスに位置するIUPUIのキャンパスは、州会議事堂からわずか2ブロックという、市内のダウンタウンに位置している。IUPUIは5つの大学病院と看護・保健を含む大規模な医歯薬系を中心に、公共政策、法律、環境などの学問分野において、多くの卒業生を輩出している<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 本稿はIUPUIのDr. Trudy Banta, Dr. Susan Kahn, Mr. Michael Yard, Ms. Cindy Williams, Ms. Mikki Jeschke, Ms. Stephanie Leslie, Ms. Dawn Whitehead, Ms. Susan Scott, Ms. Lynn Wardを始め、多くの関係者へのインタビュー調査の内容をもとに執筆した。

<sup>2</sup> 例えば、州内の約85%の歯科医や半数以上の医師、約3分の1の看護師がIUPUIの各スクールの卒業生である。他にも多くの法律家やソーシャルワーカー、リハビリテーションの専門家などを輩出しており、インディアナ州の公共政策に対しても大きく貢献している。

約 30,000 人（内大学院生数は約 4 分の 1）の学生に対して、教員数は約 7,000 人（パートタイム教員を含む）に上り、250 以上のメジャーと 21 のスクールの卒業生はそれぞれ、インディアナ大学、もしくはパデュー大学から学位を授与される。また、常時 1,000 人を超す学生が学生寮を始めとしたキャンパス内に居住しており、インディアナポリスの政治・教育団体との連携を背景に、サービスマーケティングやインターンシップなどの学習支援プログラムも盛んに行われている。

このような地域との強い結びつきの中で、IUPUI の教育プログラムは専門職養成を核として発展してきた。加えて近年では、州政府やアクレディテーション団体の外圧により、学士課程教育における学生の学習成果の向上などの課題にも積極的に取り組んでいる。

## 2-2 Eポートフォリオ導入の背景

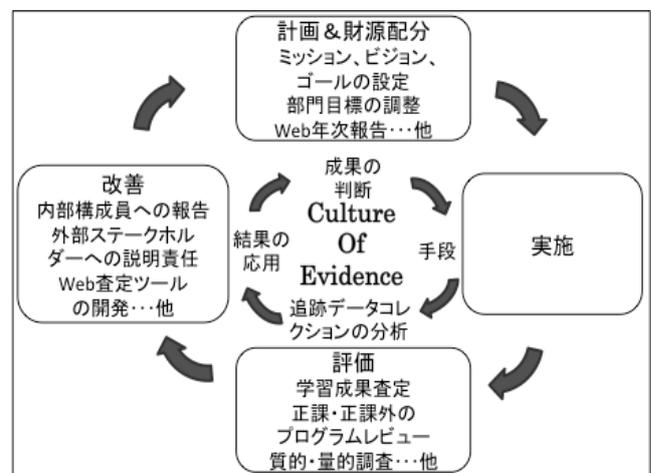
IUPUI は 2002 年に最初の機関ポートフォリオ（institutional portfolio）<sup>3</sup> を作成し、公開した。以後、毎年機関ポートフォリオは更新され、機関の自己評価ツールとして活用されている。同じころ、地域アクレディテーションや州政府に加え、専門職養成に関わる教育プログラムを多く有する IUPUI にとって、大きな影響を与えてきた専門分野ごとのアクレディテーション団体からも、学生の学習の促進や、学習成果の向上といった課題が突き付けられることになった。

そこで IUPUI における学士課程教育全体の改善プロセスとして、「計画 & 財源配分」-「実施」-「評価」-「改善」による一連の「カルチャー・オブ・エビデンス（データを基にした教育改善モデル）」が示された（図 1）。中でも「評価」の段階において、いかに学生の学習成果を質的、量的に把握するかが大きな課題であった。特に IUPUI が設定した学習成果査定の対象は、正課教育のみならず正課外における教育的プログラムも包含していたため、より多面的かつ追跡的な学生の学習状況

の把握のためのツールを取り入れることが求められた。そこで、従来から取り組まれてきた全米レベルの学生アンケート調査に加え、IUPUI 独自の学生アンケート調査の実施、さらに Eポートフォリオを組み込むことが検討され始めた。

その後 2005 年頃から、大学 IT サービスセンター（Center of University Information Technology Service）、教育学習センター（Center for Teaching and Learning）が中心となり、全学での Eポートフォリオの導入は徐々に広がっていった。現在、IUPUI において Eポートフォリオは、学士課程教育全体の 75% のプログラムにおいて活用されるに至っている。

図 1 IUPUI における計画、評価、改善



<sup>3</sup> 機関ポートフォリオについての詳細は次の URL を参照。 < <http://www.iport.iupui.edu/> > (2012 年 12 月 20 日参照)

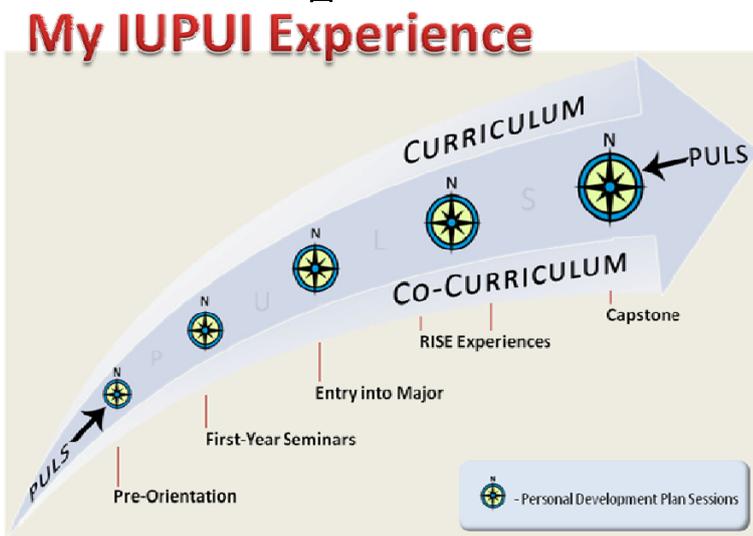
導入当初は、Eポートフォリオに対する意見は賛否両論あり、特に教員層からの反発が比較的多かったようである。しかし、一方でITツールに慣れており、新しいものを受け入れることにあまり抵抗を感じない学生層には、比較的スムーズに受け入れられていった。その大きな理由として、就職活動の時にリクルーターや雇用先に対して、Eポートフォリオを通じて、より良く自分をアピールすることができるようになった等、学生自身がEポートフォリオを活用するメリットを感じていると考えられている。

このように、IUPUIにおいてEポートフォリオは、学生の学習成果の査定ツールの一つとして位置づけられ、トップダウン式のリーダーシップの下、全学へと広がっていった。それでは実際にEポートフォリオはどのように教育活動の中に取り入れられているのだろうか。次節ではIUPUIが推進するEポートフォリオを用いた修学支援プログラムに焦点を当て、実際の活用状況を明らかにしていく。

### 2-3 ePDP (Personal Development Plan: 修学支援プログラム)<sup>4</sup>

ePDPはIUPUIにおいて、新たに取り組みが始まったEポートフォリオを用いた修学支援プログラムである。ePDPは学士課程全体を対象とし、学生の入学から卒業までの成長を軸に、プレオリエンテーション(入学前)、初年次セミナー、メジャー選択、キャップストーン(最終年次)といった、学生の修学上での変化が起きる時に、正課と正課外教育の両面からの学習の足跡をコレクションし、自己査定・省察を行うことで、学生の主体的かつ自律的な修学や進路プランの設定を促していくものである(図2)。

図 2



出典：<https://pdp.uc.iupui.edu/AboutePDP/Presentations.aspx>

(2012年12月20日参照)

その内容や方法は所属プログラムの教員やアドバイザーによって異なり、第1 Semester(10~11週)で終了するセミナーもあれば、第2 Semesterまで続くセミナーもある。このような多様な初年次セミナーの内容の中で、共通に学生が取り組むのがEポートフォリオを用いたePDPである。

現在は主に初年次セミナーとキャップストーンコースにおいてEポートフォリオを用いたePDPが実践されている。今後は授業を中心にしたものだけでなく、IUPUIが地域と連携して進めているサービスラーニングやインターンシップ、さらに海外体験学習などの正課外の活動においてもePDPの展開を視野に入れ、現在準備を進めている。

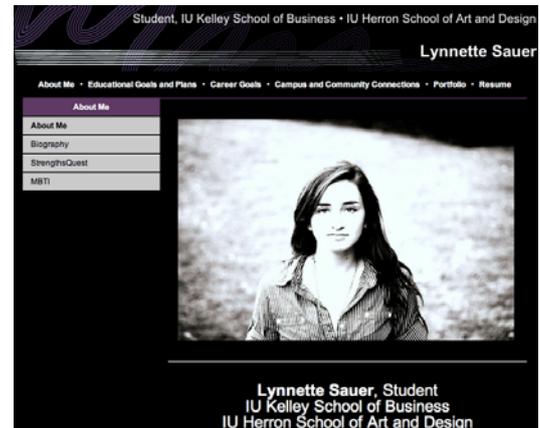
初年次セミナーは必須登録科目として全新入生に課せられており、多くの場合、週に1回の授業形式(class meeting)で開講される。

<sup>4</sup> ePDPについての詳細は次のURLを参照。<<https://pdp.uc.iupui.edu>> (2012年12月20日参照)

学生は最初の週にEポートフォリオの操作方法や概要のレクチャーを受けた後、次週から個人のキャリア目標や学修・活動の計画をEポートフォリオ上で設定していく。その後はアカデミック・アドバイザー<sup>5</sup>や、担当教員とともに、受講した授業や、様々な正課外活動における学習経験の記録、省察・査定を繰り返し、目標や計画の修正を行っていく。学生がEポートフォリオ上で作成した文章には、毎週教員やアドバイザー、学生メンター等からコメントが入る他、学生同士でもコメントを付けていく<sup>6</sup>。

プログラムの中には、以前は学習経験の記録や、担当教員からのフィードバック等を紙媒体のポートフォリオで行っていたケースもあり、約300ページに及ぶポートフォリオの管理や学生同士のコメントのやり取りの難しさが問題となっていた。そのため、Eポートフォリオによってオンライン管理が可能となったことで、より学生に対するきめ細かな対応が可能になったと考える教員もいる。さらに目標や学習経験は、「ステートメント」と呼称されている文章としてEポートフォリオ上に蓄積されていき、最終的に書式、写真、背景など自由にカスタマイズしたうえで、Web上で公開することができる(図3)。

図 3



出典：<http://pdp.uc.iupui.edu/Gallery.aspx>

(2012年12月20日参照)

このようにePDPの最初の段階である初年次セミナーでは、Eポートフォリオにおいて修学上のキャリア目標や計画の設定、目標に対する進捗状況の確認(必要な授業を取っているか、活動に参加しているか等)を、教員やアドバイザーが一人一人の学生に関わりながら、主体的な学びに重要な要素と考えられている自己評価スキルの向上を促していく。

さらに最終年次に受講するキャップストーンコースでは、これまでの学習経験や活動について、自身で設定したキャリア目標に向かって徹底した自己省察を行い、特に批判的思考力等の能力を身につけているかどうか等、学士課程教育において獲得した能力やスキルについての自己査定へと繋げていく。こうして省察、査定した内容は、初年次セミナー時と同様にステートメントとして改めて作成され、書式等をカスタマイズしたうえで公開することができる。そして学生は就職活動の際にリクルーターに自分のステートメントが公開されているURLを伝えることで、自己アピールとして活用していく。

<sup>5</sup> アカデミック・アドバイザーはスクール、学部によって、教員が担う場合とアカデミック・アドバイザーの専門職が担う場合の2パターンがあるが、近年IUPUIでは専門職を配置するケースが増えてきている。

<sup>6</sup> 心理学の初年次セミナーでは、1教員につき約70名の学生が配属され、学生メンターも含め、コミュニティを形成する良い機会としてEポートフォリオが活用されている。また他の学生へのコメントを付ける行為を批判的思考力のトレーニングの一環として捉え、事前に決められた4～5つの視点からコメントを付けることが学生に指示される。

## 2-4 IUPUIにおけるEポートフォリオ運用の特徴と課題

以上のように、IUPUIにおけるEポートフォリオは、ePDPという修学支援プログラムの中で大いに活用されていた。初年次セミナーでは、修学上のキャリア目標に対する学修目標や計画の策定、それに対する自己査定が行われている。一方でキャップストーンコースでは、学士課程における学習経験を総括するステートメントの作成を通じて、徹底した省察を促していた。

Eポートフォリオの運用面では、教育の質保証の下、全学的なトップダウン式の強力なリーダーシップにより、各スクールから運用経費をタックス(tax)として集め、大学ITサービスが開発、運用している。一方で教育学習センターは、Eポートフォリオの利用促進と支援に努めており、PD(professional development)セミナーやランチ会を通じて、学内の先行事例の紹介等、教員へEポートフォリオの理解を積極的に広げている。他にも、教員同士が活用方法を共有し、ディスカッションする機会も多く設けている。その特徴として、支援対象が学生よりも教員に焦点が当てられていることが挙げられる。特にノンテニユア(非終身雇用)教員<sup>7</sup>は授業負担も多く、初年次セミナーやキャップストーンコースのような特別なクラスを受け持つことも多いため、彼らを対象にしたセミナーも多く開催されており、より多くの学生にEポートフォリオや新しい教授スタイルを伝える事が可能になると考えられている。

今後の課題としては、Eポートフォリオと学習成果分析をどのように結びつけるかが挙げられる。IUPUIでは、Eポートフォリオを学生の学びにおいて、目標設定や自己省察、そしてキャリア形成に活用していることが伺えた。また、Eポートフォリオを使用する事で、学生同士の相互学習の促進や、教員にとって学生の学習状況のよりよい把握が可能となっていることも観察された。しかしその一方で、そもそもEポートフォリオの導入のきっかけとなった、学習成果の客観的・量的なエビデンスの提供はまだこれからの課題であるように思われた。そもそも、学習成果を量的・客観的に示すには、Eポートフォリオに蓄積されている膨大な質的データを、しかも学生の振り返りによる主観的なデータを、外部の人々や機関が理解できるように簡潔かつ客観的な形で示す必要があると思われる。しかし、少なくとも現在のIUPUIにおけるEポートフォリオの活用は、学びの当事者である学生へのベネフィットを主体としてデザインされており、学生の学習を多面的かつ客観的に評価するという「カルチャー・オブ・エビデンス」には至っていない。同様に自己評価に重点が置かれているePDPを、大学が証明することが求められている学生の学習成果の評価にどのように結びつけていくのか等、課題も残っている。

翻って、日本の大学においてEポートフォリオが注目されつつある背景には、学びの質保証や学習成果分析が存在すると思われる。もしこのような目的からEポートフォリオを導入するならば、ルーブリックや統計的な信頼性・妥当性をクリアした質問紙・尺度を併用する等して、客観的な学びの成果を外部に示せる機能もEポートフォリオに盛り込む必要があると考えられる。そして、学生の主観的な振り返りを通して

<sup>7</sup> ノンテニユア教員は毎年、スクールチェア(学部長等)の教育評価インタビューを受けることになっており、場合によってはセミナー受講を義務づけられることもある。このように、教育評価を通じてEポート利用に対するモチベーション向上を図っている。

主体的な学びを促進する機能と、客観的な学習成果を明示できる機能が統合されてこそ、Eポートフォリオの真価が発揮されるのではないかという点が、今回の大学訪問を通して筆者らが強く感じたことである。

**< 参考資料 >**

- ・ Banta, T.W. & Kahn, S. (2003). Assessment, accreditation, and the web: IUPUI's electronic institutional portfolio. In S.E. Van Kollenburg (Ed.), A collection of papers on self-study and institutional improvement, 2003:Vol. 2. Organizational effectiveness and future directions. Chicago: The Higher Learning Commission of the North Central Association of Colleges and Schools.
- ・ Banta, T.W., (Ed.) (2003). Portfolio assessment: Uses, cases, scoring, and impact. Assessment Update Collections. San Francisco: Jossey-Bass.